学苑　No. 826　(21)～(28)（2009・8）

スペイン語の虚辞の否定についての考察

田　林　洋　一

1. 序

本稿では，スペイン語の否定語が出現しているにもかかわらず命題に否定極性を与えない（即ち否定文にならない），いわゆる虚辞の否定（Negación Expletiva）について考察する[1]。虚辞の否定とは，以下のような現象である。

(1) a. ¡Cuántas horas no habré pasado en la hamaca contemplando el mar, claro o tempestuoso, verde o azul, rojo en el crepúsculo, plateado a la luz de la luna y lleno de misterio bajo el cielo cuajado de estrellas. [Pío Baroja, 1941: 9 Las Inquietudes de Shanti Andía. Espasa Calpe.]

b. ¡Cuántas gentes no se habrá sacrificado por esas ideas del rango y de la posición social, que después de todo, no sirven para nada! [Ibid: 221]

出口（1997: 184-185）

(1)-a は否定環境を作る否定語 no が動詞 habré pasado の前に置かれているにもかかわらず，「ハンモックの中で海を眺めながら長時間過ごした」と肯定文として解釈される。また，(1)-b も同様であり，「多くの人々が犠牲になった」と肯定文として解釈されるが，やはり否定語 no が動詞 se habrá sacrificado の前に置かれている。つまり，否定語 no があってもなくても命題の真理値及び極性に影響はない。このように，否定語がある命題（文）に否定極性を与える位置に出現しているにもかかわらず，否定文にはならない現象を虚辞の否定と定義する。

虚辞の否定には二種類あり，一つはスペイン語のプロトタイプ的な否定語 no であり，もう一つはそれ以外の否定語 nada, nadie, ninguno/a, jamás, nunca, ni, tampoco の 7 種類が出現するタイプである。なお，スペイン語の否定語は閉じた類（Closed Class）であり，機能語と同じく基本的に有限個である（詳しくは田林（2008）他を参照）。

上記の否定語は，すべて虚辞の否定として振る舞う可能性を持っている。本稿では，①虚辞の否定が出現するとモダリティが変化するという意味的観点と，②虚辞の否定が出現する文法的な条件という統語的観点から，虚辞の否定として，no が出現する場合とそれ以外の否定語が出現する場合に分けて考察する。

1　出口（1995, 1997）や山田（1995）は「虚辞の no」としているが，厳密に述べるならば no 以外の否定語も虚辞の否定として機能することがある。Sánchez López（1999: 2627）は虚辞的否定（La Negación Expletiva）という用語を用いているが，考察の対象としているのは否定語 no のみである。Bosque（1980）は虚辞の否定そのものを考察しておらず，Negación Espúrea という術語を用いて若干の言及をしているに過ぎない。

2. 虚辞の否定について

2.1 虚辞の否定 no について

虚辞の否定について顕著な先行研究は少ないが，萌芽的な研究としては Carnicer（1977），他言語との比較については Joly（1972），その他の先行研究として出口（1995: 33-34, 1997: 182-187），Espinal（1992）等が挙げられる。

本稿では，虚辞の否定は，①疑惑や恐れを表す否定含意述語の従属節における補文標識 que または de que の代わり，②比較構文，③hasta que や antes que / de に後続する時間の副詞節，④修辞疑問文ないしは修辞感嘆文，⑤que の連続を避けるため等に出現しうると仮定する[2]。このうち，①〜④はいずれも否定極性誘因子（Inductores de Polaridad Negativa）であり否定語の出現を許すが，現れた否定語が否定極性を持たず，意味に否定を合意しないという点で「虚辞的」である[3]。⑤は，統語的な冗長性を防ぐために虚辞の否定が出現する場合である（なお，①もこの説明が適用されうる）。

（2） a. Juan teme no vaya a suspender su examen de geometría.
b. Más vale ser feliz con poco dinero que no desgraciado con mucho.
c. No me iré de aquí hasta que no me hayas dicho lo que quiero oír.
d. ¡Cuánto no habrá trabajado María para lograr ese puesto!

Sánchez López（1999: 2627）

e. Prefieren que llueva que no que haga tanto frío.
f. Temíamos no nos fuesen a dejar sin comer.

山田（1995: 554）

(2)-a 及び（2)-f は疑惑や恐怖を表す動詞の補文標識 que または de que の代わり，(2)-b は比較構文，(2)-c は時の副詞節，(2)-d は修辞疑問文ないしは感嘆文，(2)-e は que の連続を避けるため，それぞれ虚辞の否定が現れている例である。

（1）及び（2）は，否定語 no がなくとも真理値に影響はないことは上述したが，含意される意味は異なる。Sánchez López によると，これらの虚辞的否定（否定語 no）の出現を許す文脈は，暗黙の否定，仮想的または非現実の意味を持つとしている。(2)-a において，Juan は試験に落ちるのではないかと怖がっているため，「落ちないといい」という仮想的な意味が含意されている（(2)-f も同様）。また，(2)-b はたくさんのお金を持っているわけではないので，暗黙の否定ないしは仮想的な含意を表すマーカーとして虚辞の否定が機能している。(2)-c は，hasta que 以下の命題がまだ実現していないため非現実の意味を持つ。

（3） a. Ana no se fue hasta que（no）llegó Pedro.
b. No entregué el trabajo hasta（no）estar seguro de que estaba bien.

Sánchez López（1999: 2630）

2 実際には虚辞の否定が出現するには更なる統語的及び意味的な制約がある。なお，中世スペイン語ではほとんどの否定環境で虚辞の否定を許したと Sánchez López は指摘する。詳しくは Llorens（1929），Wagenaar（1930）他を参照。

3 本稿では否定極性誘因子（Inductores de Polaridad Negativa）を「否定語が出現しうる環境を作る要素」と暫定的に定義する。代表的な否定極性誘因子は比較構文や否定含意述語の補文などである。

(3) の hasta に後続する命題は，主節の命題が生じない限り起こらない。従って，虚辞の否定がない場合よりも非現実を強く表していると思われる。

(2)-d は「苦労したなんてものではない」という強調された暗黙の否定の含意を持つ。(2)-e は統語的な理由によるものであるが，「こんなに寒い」という命題が「こんなに寒いのではなくて，それよりも雨が降る方がよい」と婉曲的に強調を含意する[4]。

さて，出口（1997: 185）は（1）が虚辞の否定を持つ理由について，以下のように述べている。即ち，「Cuánto で導かれる感嘆文の基底には，「多数」を含意する no sé cuántas horas . . . , no sé cuánta gente . . . のような主文構造が考えられ，その主節の意味の核である「否定」が上位文から切り離されて独立文となっている旧間接疑問節（即ち（1））に，補償的に潜入したのではないか」とするものである。しかし，多数を含意するのは Cuánto による感嘆文の効果であり，命題全体が含意するのはあくまで「否定」である。即ち，「何時間経ったのか分からないが，とにかく長い時間」という暗黙の否定がメタ言語的に強調されているのであり，わざわざ上位文と旧間接疑問節を設定する必要はない。

Sánchez López は虚辞の否定の出現条件を「疑惑や恐れを表す動詞の後（tras verbos de duda y temor)」と説明しているが，やや正確さに欠ける。実際には，①や（2)-a で示したように，本来ならば「疑惑や恐れを表す動詞の後に続く従属節における補文標識 que または de que の代わり」に出現しているのであって「動詞の後に来る」だけでは虚辞の否定とはなり得ない。

(4) *Juan teme no que vaya a suspender su examen de geometría.
(5) Juan teme que no vaya a suspender su examen de geometría.

(4) は Sánchez López の指示に従った結果であるが，非文となる。「動詞の後」という解釈をやや拡大して「動詞が導く補文標識の後」と規定しなおしたとしても，(5) と (2)-a は従属節内の極性が異なる（(2)-a の従属節内は肯定環境であり，(5) の従属節内は否定環境である)。

当然のことながら，Sánchez López は上記の問題点に気がついていた。そこで Sánchez López は以下の文を挙げて，補文標識 que ないしは de que がある場合とない場合について新たに説明を試みている。

(6) a. Temo (que) no venga Pepe.
b. Dudo (que) no tengas razón en lo que dices.
c. Tenía miedo (de que) no se hubiese equivocado.

Sánchez López (1999: 2628)

---

4 かなりの制約はあるが，強調を意味する虚辞の否定は日本語にも出現する。
（ｉ）（薄気味の悪い部屋に入って）この部屋はぞっとしないなぁ。
（ｉ）には虚辞的な否定語「しない」が出現しているが，（ｉ）の話し手は，実際は部屋のことを不気味に思い，ぞっとするような体験をするのではないかと思っている。従って，話し手が本当に伝達したい情報は「この部屋はぞっとする」である（即ち，虚辞的に出現した否定語「しない」は命題の真理値に影響しない)。スペイン語の虚辞の否定と共通するのは，①厳密にはその命題がまだ行われていないこと（（ｉ）では「ぞっとする出来事」が起こりそうな部屋であると述べているだけで，実際にぞっとするような出来事が起きたわけではない)，②暗黙に否定を含意する（（ｉ）では，ぞっとするような出来事が起こらなければいいという話し手の心理がある)，の二点である。

(6)-a では補文標識がない場合（本稿の説明では補文標識 que が虚辞の否定に代わっている時）は虚辞の否定の解釈，即ち字義通りには「ぺぺが来ることを恐れている」という解釈しかできないが，補文標識がある場合には，従属節が否定の解釈，即ち「ぺぺが来ないことを恐れている」と解釈される。(6)-b 及び（6)-c の解釈も同様である。しかし，Sánchez López が，いわば補助的にこの説明をしなければならなくなったのは，虚辞の否定の出現条件を「動詞の後」としたことであり，否定含意述語の補文に出現しうるという本稿の出現条件を定めておけば，最初からこの説明をする必要がない。更に，Sánchez López は続けて，虚辞の否定が現れる環境は接続法を要求すると説明するが，従属節内の動詞に接続法を要求するのは主節の否定含意述語である temer や dudar ないしは仮現的な命題であり，虚辞の否定そのものではない。

虚辞的な否定が比較構文にも出現することは既に（2)-b で見た。しかし，比較の対象が前置詞句，及び de lo que や a によって導かれた比較構文では虚辞の否定が出現できず，従属節が定形動詞（Verbo Flexivo）の場合だと従属節内の命題が字義通りに否定されてしまうため，比較の対象が不定形動詞（Verbo no Flexivo）の方が虚辞の否定の発生率は高くなる。

(7) a. María canta mejor que (*no) baila.
　　b. Mejor sabe María cantar que no bailar.
(8) a. Más vale tener que no desear.
　　b. Prefiero tener a (*no) desear.
　　c. Es mejor ganar poco que no perder el trabajo.
　　d. Es preferible ganar poco en lugar de (*no) perder el trabajo.
　　e. Juan era antes más simpático que ahora.
　　f. Juan era antes más simpático de lo que (*no) es ahora.

Sánchez López (1999: 2629)

(7)-a は定形節 baila が比較の対象になっているため，虚辞の否定は取れない。しかし，不定形節 bailar の形で出現している（7)-b は，虚辞の否定を許す。(8) も比較構文に虚辞の否定が出現しているが，虚辞の否定の no の前に de lo que や a が出現している場合は非文となる[5]。

更に，修辞感嘆文に出現する虚辞の否定について考察する。

---

5 比較構文での虚辞の否定の特殊な振る舞いに対して，記述的妥当性（Descriptive Adequacy）を求めることを本稿では目的としない。敢えて一般性のある説明原理を立てるとしたら，①定形節よりも不定形節の方が虚辞の否定を取りやすい，②前置詞句を比較の対象とする比較構文において，虚辞の否定は出現しづらい，の二点が挙げられるが，あくまで傾向である。なお，定形節よりも不定形節の方が否定の移動（Transporte de la Negación）を許容する傾向にあることから，不定形節と否定語には更なる関連性が示唆される。

(i) a. *It isn't possible that he will arrive until midnight.
　　b. It isn't possible for him to arrive until midnight.
(ii) a. *It isn't certain that he will arrive until midnight.
　　b. He isn't certain to arrive unitil midnight.

Horn (1978: 159-160)

(iii) a. Quiero que no llames.
　　b. No quiero que llames.
(iv) a. Repito que no lo haces muy bien.
　　b. No repito que lo hagas muy bien.

(9) a. ¡Qué de dinero no tendrá para poder permitirse esos lujos!

Sánchez López (1999: 2629)

b. Cuál no sería su sorpresa cuando la encontró muerta junto a la mesa.

山田 (1995: 554)

(9) は否定語がなくとも真理値は変わらない。(9) が主張するのは命題における量的な姿勢であり((9)-a の場合は「どれだけたくさんのお金があるのか」, (9)-b の場合は「どれだけ驚いたか」), 虚辞の否定の出現を許すが, 質的な感嘆文では虚辞の否定は出現できないと Sánchez López は主張する。

(10) a. ¡Quién aguantaría a esos amigos tuyos!

b. ¡Quién no aguantaría a esos amigos tuyos!

Sánchez López (1999: 2630)

これらは否定極性誘因子として働く修辞感嘆文であり, (10)-a の字義通りの解釈は「君の友達に誰が我慢できようか」であるが, 含意として「いや, 誰も我慢できない」という解釈があり, 結果として否定極性を持つ。一方, (10)-b の文字通りの解釈は「君の友達に誰が我慢できないんだ」であるが, 含意として「いや, 誰でも我慢できる」という解釈が残り, 結果として二重否定の解釈, 即ち肯定極性を持つ。

しかし, あるインフォーマントによると (9) についても修辞的な含意 (即ち反意の含意) の解釈が不可能ではないという。つまり, (9)-a は, 例えばある貧乏人がお金持ちに対し「どれだけお金を持っていないんだ」(本当はたくさん持っているだろう) と皮肉を表したい時に発言することができる。また, (9)-b は死体を前にしても強がって平然としている風を装っている人間に対して「どれだけ驚かないんだ」(本当は驚いているんだろう) という反意ないし皮肉の解釈も可能である。即ち, (9) の否定語 no は虚辞の否定とも修辞的な意味とも取りうるが, (10) はその質的な性質のため, 虚辞の否定としては分析できず, 否定語 no は通常通り単体で否定極性を与える。結果として (10)-b は否定命題の反意, 即ち二重否定となり, 肯定極性を持つということである[6]。

2.2 No 以外の否定語の虚辞の否定について

no 以外の否定語が虚辞的な否定として出現する例は非常に稀である[7]。

(11) a. Lo hice por / para / ?con / nada.

b. ?Para una vez que haces nada hay que ver lo que protestas.

(i) と (ii) は補文が不定形節のために英語の否定の移動が許されている例である。また, (iii) は意味的に等価, (iv) は意味的に反対のことを述べているが, (iii) の動詞 querer は不定形節を, (iv) の動詞 repetir は定形節を, それぞれ補文に取りやすい。詳しくは田林 (forthcoming) を参照。

6 なお, 虚辞の否定は通常の否定語としての意味的標識ではない。虚辞の否定が出現する最大の目的は話者の心的命題態度, 即ちモダリティの強調であり, 命題自身の極性判断については影響を及ぼさないためである。従って, 虚辞の否定は語用論的な「強調」の意を持つ言語表現であり, 意味論的な真理値への貢献はない。

7 Bosque は虚辞の否定そのものに言及することはなく, また, Sánchez López も虚辞の否定は no のみであるとしている。更に山田 (1995: 554-555) や出口 (1997: 182-186) も虚辞の否定に関して扱っているのは no だけで, それ以外の否定語については触れていない。

c. Lo vi en el bar hace nada.

d. Pensar en nada.

e. Hace nada que se ha marchado.

Bosque（1980: 41）

（12） a. Estuvo en nada que riñésemos.

b. No estuvo en nada que riñésemos.

出口（1997: 186）

c. Nada estuvo en que riñésemos.

Voigt（1979: 144）

通常 no 以外の否定語は，動詞に後置されている時には動詞に前置されている他の否定語を必要とするか，ないしは否定極性誘因子を必要とする。しかし，（11）及び（12)-a にはそれが現れていない[8]。否定極性誘因子を伴わずに動詞に後置された否定語は文体的強調の意味を持ち，その点で虚辞の否定 no と意味的に類似する。

（13） a. Lo hice por / para /?con / algo.

b. Para una vez que haces algo hay que ver lo que protestas.

c. Lo vi en el bar hace algo.

d. Pensar en algo.

e. *Hace algo que se ha marchado.

（14） *Estuvo en algo que riñésemos.

（15） No pensar en nada.

（13）及び（14）は，（11）及び（12)-a のそれぞれ対応する否定語を肯定極性項目に置き換えたものである。このうち，（13)-e 及び（14）は非文となる。従って，hace nada 及び estar en nada はそれぞれ半ば語彙化されている（前者は「ちょっと前に」，後者は「もう少しで〜するところだった」）と考えられる。(13)-d は，（11)-d と明らかに意味が異なる。(11)-d は禅の世界などでの「無を考えよ」という宗教的ないしは哲学的な文であるが，(13)-d は「何かを考えよ」と述べているに過ぎない。それ故，(11)-d において否定語 no が動詞に前置した場合である（15）は「何も考えない」と解釈され，(11)-d 及び（13)-d とは異なる。

（11)-d と対照的なのは（12）である。(12)-a は（12)-b が示すように，否定語が動詞に前置しても意味は変わらず，更には（12)-c のように否定語前置構文として機能しても意味は変わらない。但し，(12）自体が「もう少しで口論になるところだった」と述べているため，厳密な意味で否定を表出しているのではなく，「しかし，口論はしなかった」というように，論理的含意において否定が現れていると見たほうが正しい。従って，（12）はいずれもメタ言語的な意味で否定を内包はするが，実際は強調の意として否定語が現れているだけで，命題自体は肯定極性を持つ。

更に，Bosque は以下の例を挙げて，動詞に前置されなければならない否定語が省略されるのは，

8 修辞疑問文ないしは修辞感嘆文が否定極性誘因子として働いている場合はその限りではない。本稿では，（修辞疑問文及び修辞感嘆文を含めて）否定極性誘因子が現れていないのに，no 以外の否定語が動詞に後置するケースを no 以外の虚辞の否定に分類する。

口語的な表現でも見られると主張する。

（16） La conclusión de la reunión fue ... ninguna.

Bosque（1980: 41）

しかし（16）が（11）と同様に虚辞の否定として強調の意味を持っているとは考えにくい。むしろ，（16）の否定語 ninguna は，La conclusión de la reunión fue とは完全に乖離していると見たほうが説得力がある。即ち，（16）の話者は二つの文（ないしは命題）を発していることになり，La conclusión de la reunión fue という「会議の結果は（何か）」という命題に対していったんポーズを置いた後，改めて自分に対する返答の意味で（La conclusión de la reunión no fue）... ninguna.と前の句を省略して発話しているものと思われる。

no 以外の虚辞の否定が出現するにも，かなりの制約がある。（17）の非文法性は，今までの文体的強調だけでは説明できない。更に，（18)-a 及び（19)-a の文法性と（18)-b 及び（19)-b の非文法性も説明が困難である。

（17） *Le sacaron la muela con ningún instrumento.

（18） a. Tantos años estudiando para nada.

b. *Tantos años trabajando en ningún sitio.

（19） a. Lucharon por nada.

b. *Lucharon por ninguna causa.

（18）及び（19）で，それぞれ意味的差異を見つけるのは困難であるが，傾向を述べるならば，para nada や por nada は半ば語彙化された表現であるのに対し，en ningún sitio や por ninguna causa は定着するほど語彙化されていない。つまり，para nada や por nada という言い回しは「無駄に」という語彙項目として既に独立した慣用句に近い性質を持ち，先行する命題に否定極性を要求しないという可能性が考えられる。

ここで注意しなければならないことは，虚辞の否定とは，前節で述べたように本来ならば否定語の出現によって否定極性が生じるはずなのに肯定極性を持つ言語現象であり，本節で述べる否定語（ないしは否定極性誘因子）が伴わないにもかかわらず動詞に後置して出現する否定極性項目としての否定語とは厳密に区別されなければいけないということである。これは，否定語 no とそれ以外の否定語の機能の差異に起因する。

もう一つ区別すべきは，否定極性誘因子の一つである修辞感嘆文ないしは修辞疑問文が，否定語が出現していないのに否定の意味を持ち，その結果否定極性項目が出現するケースである。このケースは，そもそも否定語が出現していないが，否定極性誘因子の影響下にあるために否定極性項目の出現を許す。従って，この場合は虚辞の否定とは呼べない。

以上，no 以外の虚辞の否定は，虚辞の否定の no と同様に強調という語用論的含意を持つが，出現条件は基本的に習慣化ないしは語彙化されているために制約はより厳しいことを見た。即ち，虚辞の否定は語用論的な強調の含意を共通のスキーマとして持ち，そのプロトタイプは虚辞の否定の no が持つ。一方，no 以外の虚辞の否定は慣習化されているという点で，プロトタイプからやや逸脱した言語表現である。

3. 結　語

本稿では，主にスペイン語の虚辞の否定の出現条件とその意味について考察した。まず，虚辞の否定を no とそれ以外の否定語の場合に分け，それぞれにおいて虚辞の否定の出現条件を考察した。具体的には，否定語 no の場合は，補文標識の代わりや比較構文，時間の副詞節，修辞文及び文体的な冗長性（que の連続）を避けるために置かれる傾向にある。この意味で，虚辞の否定は統語的な要因に加え，話者の心的態度を示した語用論的，認知的な視野から発生する文体的な理由によって発生することが分かる。特に顕著な点は話者の心的態度，すなわちモダリティによって虚辞の否定が出現しうることで，認知的なアプローチと文法的アプローチのインターフェイスとなっている。修辞的な含意も，広義の認知的な側面といえる。

一方，no 以外の虚辞の否定は出現条件が非常に厳しく，先行研究では例外的扱いを受けることが非常に多かった。これは，no 以外の虚辞の否定が主に慣用句的な性質をもち，字義通りに解釈することが少ないことに起因する。しかし，同様に上述の認知的な効果によって出現することが予測される。

今後の課題として，否定極性誘因子の種類に応じて虚辞の否定にどのような統語的・意味的差異が確認されるのかを検証したい。

参考文献

Bosque, I（1980）*Sobre la negación*. Cátedra.

Carnicer, R（1977）“No expletivo”. *Tradición y evolución en el lenguaje actual*. Prensa Española. 93-97.

出口厚実（1995）「シンタクシス辺境への視点: スペイン語の場合」『大阪外国語大学論集』14. 17-36.

出口厚実（1997）『スペイン語学入門』大学書林.

Espinal, M, T（1992）“Expletive Negation and Logical Absorption.” *LingR*, 9: 4. 333-358.

Horn, L（1978）“Some Aspects of Negation.” Greenberg, J, H（ed.）*Universals of Human Language. Vol. 4. Syntax*. 127-210. Stanford University Press.

Joly, A（1972）“La négation dite expletive en vieil-anglais et dans autres langues indo-européenes.” *Etudes anglaises*, 25: 1. 30-40.

Llorens, E, L（1929）*La negación en el español antiguo con referencia a otros idiomas*. Anejo de la RFE.

Sánchez López, C（1999）“La negación.” Bosque, I y Demonte, V（dir.）*Gramática descriptiva de la lengua española. Vol. 2*. 2561-2634. Espasa.

田林洋一（2008）『スペイン語の否定語の意味構造について―EN 否定を中心に』清泉女子大学博士論文.

田林洋一（forthcoming）『スペイン語の否定の移動についての諸条件』原稿.

Voigt, B（1979）*Die Negation in der spanischen Gegenwarts-sprache*. Peter Lang.

Wagenaar, K（1930）*Etude sur la négation en ancien espagnol jusqu'au XVéme siécle*. Groninga.

山田善郎監修（1995）『中級スペイン文法』白水社.

（たばやし　よういち　　総合教育センター）